熱き思いを滾（たぎ）らせ、世界へ挑戦―

夕方になると大泊地区には勇ましい掛け声と鐘の音が響き渡ります。
大会へ向けて練習する津奈木海龍の声です。
ここでは、競舟に魅せられ、日々活動する彼らの熱い思いを紹介します。

1. 競舟の楽しさを子どもたちに伝える藤井さん／2. 舟を漕ぐために筋力トレーニングも欠かさない／3. マカオでの世界大会出場時の記念写真／4. 倉庫には今まで獲得した多くの盾やトロフィーが飾られている

伝統を繋いでいくため 世界を目指し日々努力

津奈木海龍は昭和63年に結成し、ことしで35周年をむかえます。大阪府で開催されるペーロンの全国大会に出場したいという思いから、当時の海浜地区の人たちが中心になり結成されました。現在は59人のメンバーで活動し、大阪府や滋賀県、兵庫県、鹿児島県など全国各地の大会に参加しています。平成26年にはマカオで開催された世界大会に日本代表として出場しました。

普段の練習は月・水・金曜日の午後7時から。学生や社会人などさまざまな職種のメンバーが集まり、舟の漕ぎ手も10代～50代と幅広い年代がしています。練習以外にも、町内イベントでの出店や町内の草刈り作業も実施。今後は、競舟の文化を次の世代につないでいくために体験会などのイベントを予定しています。

「練習や大会だけでなく、地域との交流も大事にすることで地元から愛されるチームにしていきたい―」そんな思いを胸にキャプテンの藤井大樹さん（大泊）を中心に日々活動しています。

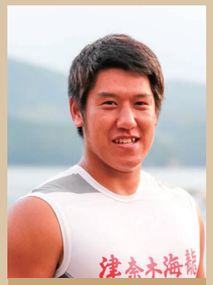
目標達成のため活動している津奈木海龍ですがコロナ禍になり、大会が無くなったことでここ数年はメンバーも減少。活動が難しかった時期もあったそうです。それでも熱い思いを絶やすことなく、練習だけは欠かすことなく続けてきました。

コロナが落ち着いたことしは、8月に水俣市で開かれた競舟大会で優勝。若いメンバーが新たに加入したことで、ベテランと若手が融合した新生「津奈木海龍」として幸先の良いスタートを切りました。現在は9月に兵庫県相生市で開催される大会に向けて練習に励んでいます。

いつかまた、世界の舞台に立つために―。彼らは今日も舟を漕ぎ続けます。

↑水俣市の競舟大会で優勝し満面の笑みを浮かべるメンバー

もう一度、あの舞台へ―



藤井 大樹さん（大泊）

中学・高校で艇長をしていて当時の選手たちの漕いでいる姿に憧れていました。競舟や海龍の存在が地元での就職を選んだ理由の１つです。私たちが９年前にマカオでの大会に出場以降、日本代表として海外の大会に出場できていないので、キャプテンとして現メンバーで大きな大会で結果を残すことが今の目標です。

若手として次世代を引っ張っていきたい

新立 颯さん（大泊）

競舟は全員の息が合わないと速く進まない究極の団体競技だと思っています。客観的に見ると、ただ漕いでいるように見えますが突き詰めるとかなり奥が深いです。競舟はまだまだマイナーな競技。チームの若手としてこれからもっと競舟が盛り上がるよう、楽しさや奥深さを広めていきたいと思います。

漕ぐことが生活の一部

伝統ある競舟を次の世代に伝えるために若い人が加入してくれるようなチーム作りや意識を持って活動しています。競舟には高校生から地区の選手として出場していて、どんどん熱中していきました。地区の方からの誘いもあり、海龍に入り、今では漕ぐことが生活の一部です。そしてこのチームのメンバーであることが私の誇りです。

津々木 滉大さん（日当）

日常では味わえない快感がそこにある

元々は県外に就職していたのですが、SNSで同級生が海龍で頑張っている姿を見て、自分もやってみたいと思い地元に帰ってきました。今の目標は筋トレを増やしチーム1番のパワーを身につけることです。競舟の魅力は全身を使って舟を漕ぐ爽快感だと思います。もっと自分を追い込み、筋力や技術に磨きをかけ、大会で良い結果を出したいです。

桑原 健さん（中尾）